

---

# 異界へようこそ

矢羽 彩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異界へようこそ

### 【Nコード】

N8467N

### 【作者名】

矢羽 彩

### 【あらすじ】

日頃から変装大好きで、日々違う人になる姿を楽しむことが趣味な女、神野宮 京子。今日も今日とていつもの街でぶらりとしていたらあーら不思議。ここはどこかね、はて？ え、異世界！？ 吾輩になぜそんなことが起こりうるかね、そこの君！！

見切り発車な上に気まぐれ更新につきご注意を。

## 日常から一歩はずれて（前書き）

思いついた日にちょっと書いてみました。

## 日常から一步はずれて

昨日とは違う角度でアイラインを入れて、今日のつけまはお嬢様仕様。それに合わせて服装は、お気に入りラインの可愛いティアイドスカートにふんわりシフォンの清楚なブラウス。ちよつと地味目だけど、ところどころにも気を配ってきちんとおしゃれ感が出るように配慮する。

「よし、かんぺっき！」

メイクや服装がうまくまとまった日は出かける前から機嫌がいい。逆に時間がなくてうまくいかなかったり、納得できないで気のままであると一日中そわそわしてしまうこともある。

「今日のは、おっけい。あっそうだ。時計時計！」

準備万端化最終チェックを入れて、何か忘れていることに気付く。そして、いつもこれだけは変えない。外出する時は必ず見つける腕時計を装着すると完了である。

「さあて、出かけるぞ」

鏡の前でにつこり笑顔を浮かべると、鞆を持って玄関から出る。家の扉に鍵をかけて、施錠を確認してから門を出て、街へ向かった。

\*\*\*

「何を食べよっかな」

毎日の食事情は毎日の楽しみの一つである。

違う自分になって、街を浮かれ気分で歩く。その間も目は新しい店や新メニューの情報を獲得する。

京子は自分のことが嫌いなのではないが、違う誰かになる、ということが大好きだ。ただ変装する際に特定の誰かを思い浮かべるのではなく、自分の魅力をどのような形で今日は伸ばしてやろうかなーっと思っただけに近い。あらゆる可能性を試して、もしかしたら違う道を歩んだかもしれない自分になってみるのである。

とはいっても、まあ実際はそんな人生などといったなかなか深い規模で考えているわけでもない。毎回違うおしゃれをして自分を楽しんでいるのに近い。しかし、すっぴんメガネで外に出てもそれはまた違う自分である、と考えているところもある。

「うわっ、ぷ」

よそ見をしていたために人にぶつかってしまったらしい。京子は一瞬息を詰まらせ、「ごめんなさいっ！」と謝ろうと顔を寄せてしまった目の前にある胸板から離れようとした。

けれども、半歩後ろに身を引き、顔を上げようとしたところでその記憶は途切れた。

否、目の前の光景は瞬時にして切り替えられてしまったのである。

「は、へ？」

間拔けな声を上げた京子がいまず目にしたものは一面の緑。気づけば、京子の周りは見渡す限りの草原になっていた。

## 一歩目のつづき（前書き）

見切り発車のため続きがどうなるのか作者すら不明な展開です。と  
りあえず明るく楽しい話になればいいなあ、と思います。

## 一歩目のつづき

「どーこーよーこー」

上には空。下には緑。

「わー大自然〜！ つじやないしッ〜！」

馬鹿みたいに首を大きく上に傾けて、次いで下を向き右、左と順次見ていく。が、何もない。

見慣れない場所で不安になる、のではなく京子はまずは状況確認と視界に映るものを見たが何も手がかりは得られそうにない。

謎解きのヒントは一切ないと言っていいだろう。

京子は不可解な場所で一人ということ、普段ならば外では控える一人喋りを存分に発揮していた。

現在の自分が足をつけている見渡しの良い大地の上ではすぐそばに人はいなさそうなので、京子はぶつぶつと好きなように構わず言葉を発する。

「あーもうッわけわかんないし！ なぜにこー！？ これからどうしろと！ あたしにサバイバルでもしろというの！？」

怒りゆえかストレス発散とばかりに呟きのように小さかった声は次第に大きくなり、今では叫ぶようになっていた。

確かに何も無いここで何かを成し得ることは挑戦かもしれない。永遠に終わりの見えない先を歩き続けるとかは拷問である。

「ちよつと、誰か答えなさいよ！ 吾輩がなぜここに居るのか、明確に明瞭に答えたまえよ、君！」

「はい。実はですね、」

「ちよつ、どこからわいてきた貴殿！」

「はあ、ですからお嬢様がお気づきの通り先ほどからおりました  
が、」

「何たる恥辱！ 今すぐそこに直れ！ 人の痴態を楽しむとは何事か！ 即刻その神経、叩き直してくれる！！」

誰もいないと思ったから一人突っ込む激しくしゃべりまくっていたのだ。それを誰かに見られてたとなると妙齡の女性としては恥ずかしいなんてものでは済まない。こやつ、呪い殺してくれようか。不穏な言葉が一瞬だけ京子の中で浮かんで消えた。

散々、友人命名である京子の一人劇場なるものをやってしまった後なので、かなり気まずいが見られてしまったものは仕方がない。忘れてしまいたい数分前までの自らの行動を頭の片隅に無理やりに追いやると京子は目の前にいる男に聞いた。

「失礼。どちらさまでしょうか？」

それにしてもこの男、無駄に整った顔立ちである。

美形は眼福、多大なる目の保養という名の癒し。夢。と日頃、京子は思っているのだが実際目の前にいると腹が立つ。

なんでそんなにまつ毛長いのよ。なんでそんなに色白なわけ？

しかもきれいな輪郭だし。見た感じ肌すべすべなんですけど。髪とかサラッサラ！ 昔読んだ漫画に出てくるみたいな艶やかな銀髪だし、目なんか紫よ紫！ どんな感じに周りの風景見えているのかしらね。あんまり医学関連は詳しくないから気になるわね、ふむ。

「私、ディオル・ヴィデエラーザと申します」

「はあ、どうも」

でおるさん？ え、何人？

というか今更ですがなんで言葉が通じているのでしょうか。ええ非常に便利ですが無宗教なわたくしの眩きもフオローしてくれるような神様。いらっしやいましたらお答えください。

信じたくないのですけれども、ここは何処でございましょうか。心の中で見たこともない神様に問いかける京子の脳裏に異世界という言葉がよぎる。

考えたくもない。京子は脳裏を過去る言葉を即刻却下した。

たとえ、目の前にいる人が以前流行っていた魔法映画の中で魔法使い役が着ていたローブなるものに似ているものを着ているとしても、それはただの民族的衣装とかたまたまそういう服を着る必要が

あつた祭事のためだったとか何か他に理由はあるはずなのですよ、神！

必死にいるかどうかも怪しい神に訴え続ける京子の願いむなしく、次の言葉は発せられた。

「異界へようこそ。キョウコ・カノミヤ」

ちよ、まだ私名乗ってません！

混乱の末に、お尋ねしましょう（前書き）

京子、内心で暴走。

## 混乱の末に、お尋ねしましょう

どうやらあちらさんは京子のことなど名乗らずとも先刻承知なようである。

まさか名前はおろか出生からその後の人生まで把握していたりして………。何が趣味で何が好きで今迄にどういった経緯を経て人格形成を成しえてきたとか………。分析されまくり？ 何学に基づいて？ え、弱点ですか？ それはそのう………。って、うわわわーっと、サイコキックなことまで想像してきてしまった！ こわいこわい！

恐るべし、異界の魔力！ でなくってえ！

異界って言ったよね、あの人！

ということは、なんですか。私がここを訪れることは決まっていたと？

それとも私の考えが読める、とか？ うーん、でもなんとなくそういうのとは違う気がいたしますね、陛下。

しかし、私なんぞ、ただの変装好きな探偵になりたいけど浮気調査とか向いてないでしょーっていう凡そ根性とか耐性とかがやや欠如しているマイペース人間ちやっぴりチキンで日々空想と萌えを求めるしがない一般人ですよ！ とても日本人らしい日本人です！ 日本食を愛し、米と梅干とみそ汁があれば生きていける！ と断言できるとかできないとか………。そういえば、ここに日本食はあるのか？ いやいや今考えても詮無いことだ。私には現在最も考えるべきことがあるう。それだそれ。思考の切り替えをせねば。うーん。

ははあ。なるほど。わかりました。

あれですね、御上！ 生贄ってやつですか！ そいつはいけませんね。時代錯誤も甚だしい！ いや、民族間による文化の違いは認められるべきだとは常々思っておりますがね。国際機関が小さな国の文化を批判しまくるのもどうかとは思ったりもしますけどね。生

贅はさすがにどうかと思うんですねー。ほら、やっぱり命は大事だし！

表情には出ないものの胸中でまくしたてるがごとく言葉を次々に言い放ち、想像力たくましく思考を展開させる。はてには一人で突っ込みをしてみよう。

人でボケ、人で突っ込み。しかも声色まで変えて、身振りに手振り。瞳はめまぐるしく回転し、頭脳は動く。

これを声にだし、表情をつけてやるとたちまち京子の一人劇場の出来上がりである。

最初はこらえていた人たちも連綿なく続く一人でのリズムカルなやり取りにたちまち笑いの箍が外れてしまう。口元は笑いにひくひくしはじめ、思わず声を上げて笑っているのだ。見るものは腹を抱えて笑うこと間違いなし。

さて、それはおいておくとして。

「あの、でおる？さん。そのう」

「ディオル、でございます。キョウコお嬢様」

京子の先ほどのテンションの落差など気にも留めず、ディオル・ヴィデラーザと名乗った白い長衣を纏った男は薄らと笑みを浮かべたまま、静かに訂正した。

それは決して冷たい雰囲気のものではなく、むしろあたたかで穏やかそのもの。眼差しはまるで京子を気遣うようなものだった。

「あの、何故わたしの名前をご存じなのでしょう？」

京子の疑問は見えないところで毎秒増えていつているが、まずは焦らずに一つ目だ。

一度にたくさん疑問を尋ねても意味が分かりにくくなるだろうし、逆に全部聞き取って立て続けに話されても京子が困る。

問いかけにディオルは安心させるように笑みを深めた。そうすると身にまとう雰囲気ぐつとやわらかくなる。きれいな顔立ち故に無表情だったのならば、きつと怖いに違いない。

ディオルの絶対零度の無表情を想像して京子は内心で凍えた。

怒らせないようにしよう。うん。

特に怒らせるつもりもないが、チキンゆえに一応肝に銘じる京子だった。

「キョウコお嬢様をこちらの世界にお呼びしたのは紛れもなくわたくしでございます。召喚に際して必要となるものは、その者が真に有する名前でありますので、私がお嬢様を間違いなくこちらにお呼びするために知った次第でございます」

はあ、そうですかー。ってどうやって調べたのかしらん。

要するに真名ってことよねー。通常使う名前とは別に秘密にされている時たま本人さえ知らないような名前だよねー。なんか真名がしれると命取りになるとかそういう設定多いけど結構好きよーってそれは関係なくてッ！

でも今時名前二つ持っているとかなんな昔なことしている一般人はいないだろうし、普通に名乗っちゃっているからねえ。調べようと思えば容易に知れるわな。

まっいいか。そこはまた今度にも深く尋ねれば。

さて次だ、次！

「あの先ほど私の耳が間違っただけで聞いていなければ、ここは異界とおっしゃったように思うのですが、その、異界という名のここはどこでしょうか？」

「ここはクラウド王国末端に位置する島でございます。キョウコお嬢様をこちらにお連れするために必要でした磁場が一番良い場所でしたので適応であるこの地にて召喚させていただきました」

磁場？ 宇宙で交信するのとか？ コンパスがきかなくなるのか？ うん？ まあいいや。わかんないし。

京子の脳裏にはなぜか深い森で遭難するシーンや二対の折れ曲がった棒を持った二人組の男が彷徨う場面が描かれていた。

「それで、わたしはなんのために呼ばれたのですか？」

ここが肝心だ。

これでこの先の生き様が決まる。最悪のケースには逃走経路を確

保したいところだが、生憎とこの見渡す限り草原ですゝっていった場所ではどうしたらいいのかわからん拙僧でござる。誰か助けてほしいでござる。ござるござる。

肝要な場面のはずなのに京子の脳内はすでに現実逃避を始めている。

いやいやいやいや。いざとなったら本当に必要なのは意識の逃避じゃなくて身体の逃避だ！

いかん！ 覚悟を決める京子ッ！ 女は度胸だ！ って漫画にも描いてあつたじゃないか！ いやドラマで見たんだったか？

結局、京子の脳内作戦会議は策を成すことなく幕を閉じた。お手上げで全面降伏だ。役に立たない。会議のために作られた無数のかたちなき声どもが机に突っ伏しているようである。

「実はお願いがあるので」

「は、い。………なんででしょうか？」

聞くことが恐ろしいが怯えたままではいられない。

なけなしの勇気を総動員して、なんとか目を合わせている相手の視線から逃れようとする自分を押しとどめる。

ディオールの口が動く。

それがやけにはつきり、しかもゆっくり見えてしまい京子の手には緊張の汗がにじんできていた。

「突然に呼び寄せてしまい、申し訳ないのですが」

「はい」

ちなみにこれは、そうなんだ！ 迷惑だぞ、この不届き者め！

といった意味のものではなく、ただの相槌である。お話しちゃんと聞いてますよーという意味である。

またまた京子の思考が本来対峙すべき事柄から外れようとしたとき、ディオールは告げた。

「王妃のお友達になってほしいのです」

「はい？」



## 魂魄共有者

「なんじゃここはッ!？」

そこは見事に大小さまざまな石が見事に形を整えられて、きれいに組まれたまさに労役の賜物であるといえる部屋だった。

その部屋に京子は一人でいた。

部屋を構成する壁面の石の造作は隠されずに見えるものの、それはそれぞれきちつとはめられていて見るだけでもしつかりしているとわかる素晴らしいものだった。そして細かい文様に赤、金、白、茶など様々な色で織られたさぞかし手が込んでいるであろう絨毯のしいてある上にこれまた豪奢な寝台、なめらかな木のツヤがある机、優美な線を描く椅子、装飾の凝った衣装棚などといった家具が配置してあった。

石造りの部屋といえはなんとなく冷たい印象を抱くのだが、この部屋は暖かな色で彩られていたので暗い雰囲気といったものより、どこか高貴な印象を持った。

見慣れない部屋だった。

どうしてここにいいのか、京子にはさっぱり見当がつかない。

しかも時折外から聞こえてくる物音や人の声。空気も馴染みないものだ。と京子の勘がいう。

一通り部屋を観察した後、寝台の中で京子は上半身を起こしたままいったい自分の身に何が起こったのかを思い出そうとする。

ぼんやりと視線を中空に漂わせた後に、京子の意識は昨日の出来事にとんだ。

「……………あ、ああッ!」

小さく叫んで目が覚めた。

\*\*\*

ご友人でなく、お友達。

そのニュアンスの差はいかに？

それはともかくお相手が王妃様ですか。そうですか、それはさぞかしご立派でいらっしゃることでしょねえ。

畳の上に座って湯呑に入った熱い緑茶を猫舌な自分でも飲めるようにふうふうさましながら、思索にふける姿を京子は脳裏にイメージしていた。

一瞬の現実逃避ののちに現実に戻り。

遠い目をしていて眼を目の前にいる人に向けると、差向いにいるディオルに平静を保とうとしながら言い募る。

「なんでそのようなことに？　といいますか、なんでお友達するためにわざわざ私をよりによって異界から呼び寄せるのですか！？」  
その辺にいる人にも頼んでくれればいいじゃない！

と内心では絶叫する。

王妃の友達なんて名誉なこと進んでやりたがるひとなんてしこたまいらつしやるのでしょうか！　たとえ王宮の事情に詳しい者は無理だとか、権力争いで危険だからとかそういった事柄で定めならさ、信用できる人とか街の人とか。

とにかく適当なところで手を打てばいいんじゃないのと思うわけよ！

どんなにのつぴきならない事情があるのかはそりゃあ知らないし、どうすれば正しいのかわかってそんなこと私にはわからないから偉そうなことは言える立場じゃないけれども！

これだけは言える。

ええ自信を持って言えるでしょうよ。

わざわざ人の人生を曲げるように召喚するほどですか！？

友情は大事ですよ。人を大切に思うことは美德でしょうね。

でも、それに振り回される人間はどうなっちゃうのよ！？

京子が非難を浮かべた表情で見やれば、その眼光にたじろぐことなくディオルは答えた。

「キョウコお嬢様」

ふつつつと煮えたぎる怒りを落着かせるようにディオルは透き通るような静かな声で京子を制した。

「あなた様が理不尽に思いになられるのも当然です。突然何も説明なしにこちらにお越しただいてしまったのです。それに、まだわたくしは目的を告げただけでその他一切の詳細をあなた様にお教えしておりません。ですから、どうか最後までお話を聞いていただいのです。説明をするお時間をわたくしにくださいませ」

淀みなく、すらすらと言葉を紡いだディオルはじつと京子を見つめる。

その視線に小さくうなずくと了承の意を見て取ったディオルは短く感謝の言葉を述べると言葉を続けた。

「キョウコお嬢様でなければ今回の務めを果たしていただくことはかなわないのです。とどのつまり、あなた様しか頼れる方が現在おりません。どうかお力添えをいただきたいのです」

京子はじつと身じろぎをせず声に耳を傾ける。

「この世界では魂を共有する存在がいることは常識になっております。それは誰か。安易に知ることにはなりませんがある方法を用いることにより、必要に応じて知ることが可能となっております。クラウド王国ではその必要が生じまして先月、調べたところ王妃のパートナーがキョウコお嬢様だと確認したのでございます」

## 誓い（前書き）

ちよい真面目モードです。

## 誓い

「しかし、これは重大な秘密となる事柄です。魂魄共有者は癒しとなる存在であると同時に最大の弱点ともなりうるのです。王妃はこの国の要であります。国を支える存在の弱点を容易に曝け出すわけにはいきません。ですので、キョウコお嬢様には別の身分を隠れ蓑にして王妃の話し相手となっていたきたいのです」

今伝えられているものは、既に決定事項であるのだろう。

ディオールの表情は揺るがない。

迷いなく、確固たる意志を持って言葉を口に出しているのだ。

内心では京子が是というか不安に思っているかもしれない。若しくは、腹の底でどうやって肯かせるのか策を練っているのかもしれない。

表情で推察することはできても相手が真に思うことは京子にはわからないことだ。

けれども、あれこれ思っても行動しなければ進まない。

「わたしが帰ることはできないのね？」

「可能性はございますが、今はお教えすることはできません。卑怯と詰っていたいただいても仕方のない所業と承知の上でのお願いです」

「そう……」

強引なやり口は気に入らないが妙なところで下手に出られてもやりにくくて困ってしまう。

もういつそのことこちらに有無を言わせずにことを運んでくれたらいくらでも文句を言えるのに、いちいちお伺いを立てられてはそれも言えない。

了解の言質を取られているな、と思うがそこからどうしようもない。

足掻こうにも、ここは京子の知らない世界で、初めて訪れた知らない土地では京子は赤子同然に無知である。

元の世界に還してもらうには、相手の条件を呑まなければならない。望みの手段は向こうの手にあるのだから。

これは取引だ。

向こうの仕業が原因ではあるけれど、仕事をこなせば望みがかなえられる。

要はギブアンドテイク。

「私がお役目を引き受け、全うすれば元の世界には返してもらえるのね？」

「はい」

覚悟を決めた京子の問いに首を縦にふるディオル。

「役目は王妃の話し相手。それ以上でもそれ以下でもない。理不尽な扱いは受けない。私の立場は保証されるとみていいのかしら？」

「そのとおりでございます。キョウコお嬢様」

気になる事項を念押しの意味も込めて確認していく。

質問の答えは憂いをはらすもの。

話し相手で済むのであれば、安いものだろう。

召喚でお約束の命をささげるのでもなく、国を救えというわけでもない。そんなに大事ではない任務なのだ。

ぐだぐだと不安を抱えて気が進まないなどといっているよりさつさと済ませたほうが話は早い。

あとは一つの心配事。

元の生活には戻れるのか。

それと、浦島太郎状態は遠慮したい。

「元の世界に戻った時、私がこちらに来る前より世界の時間は進んでいるの？」

「進んでおりますが、こちらの世界の時間はあちらの世界の時間より圧倒的にゆっくりと時が流れるので、ご心配は無用でございます。時が進んでいたとしてもほんの数時間でございましょう」

その言葉がどこまで真実か。判断するすべは京子にはない。

結局は相手を信じるしかないのだ。

この世界の常識も知識もない京子には信じる土台がない。騙されたらそれまでだ。

嘘をつく素振りがないか、京子はじつとディオルを見つめていたが、何もわからなかった。

ここはもうわりきるしかないわね……。

心ひとつでこれからが決まる。

どのみち、残された選択肢は一つだけ。

それでも。

「私がもしも排他されそうになった時の身分の保証はあるの？」

その後の生活の保障は？」

たとえば、動乱が起きて国がなくなったりすることだってあるわけ。事故に遭ってお役目を全うできなくなったり、何かで命を落とすようになることだってないわけじゃない。

断言できない不可実性の残る未来にはできるかぎり手を打っておきたい。

そう思つてのことだった。

「わたくしがあなたの安全その他すべてを保障いたします、キヨウコお嬢様」

選ぶ手は一つだけしかない。

この世界に自分は身寄りがない。確たる信じられるものが欲しい。支えが何もなし生き方なんて、あまつちよろく生きてきた京子にはきつとできない。

人生何が起こるかわからない。約束された通りに終わるなんて誰が教えてくれるというのか。

それがわかつているから最後までしつかりとした保護を求める。言葉なんてどれだけ繕えると知っていたとしても、今はその約束が欲しい。

「いかなる時もあなた様の一番の守護者であると誓いましょう」  
見えない未来への懸念に焦りを抱き、震える拳をそつと手に取られると両手で包み込まれた。

不安に揺れる瞳で京子はディオルを見上げた。

「必ずや約束を違えません。この命に誓ってあなたさまをお守りいたします」

京子と視線を合わせたまま偽りはないと信じさせてくれるようなまっすぐな眼差しでディオルは言葉が続ける。

「ですから」

声は透き通る夜の風みたいだった。

畏れる心を、優しく包み込む。

「どうか安心なさってください。キョウコお嬢様の信用に応えて見せます」

しっかりと、けれどささやくようにそう言ったディオルがふわっと微笑んだ。

その表情に不覚にも京子は目を奪われた。

## 誓い（後書き）

果たしてディオルは白か黒か！？

## 目覚めの一日目

・・・なんという、きれいな微笑みなのだろうか。

これは誰も見惚れてしまい、言葉を失うに違いない。

京子は無意識に胸を利き手で押さえていた。

何も考えていないゆえのものなのか。

こんなふうにはほほ笑まれたら、きっと何でも言われることに頷いてしまいそうだ。

笑顔なんて一言で言ってもいろんな種類があることを京子もこの年になれば知っている。

どんなに美しい笑みだって、どす黒いものがあることもわかつている。

だから、京子は普段から人の表情は細やかな部分までよく見ようとしている。

それをちよつと後悔した。

どうしてそんなふうに見つめるの。

勘違いしちゃいそうだよ。

むしろ見なければよかった。

壮絶すぎて京子のような脆弱な心臓を持つ人間には破壊力がはかり知れない。

この人は自分の笑顔の威力というものをもう少し知った方がいいんじゃないだろうか、と思った。

「そ、それで詳しくは？」

いまだばくばくとうるさい鼓動を必死で落ち着かせながら京子は訊いた。

真顔に戻ったディオルは赤く染まりつつある空にちらりと目を向けると言った。

「話をするのでしたら場所を変えましょうか。いつまでも、ここではなんですから」

「わかりました」

確かにもう夕暮れだ。

少し風も肌寒くなってきた。

「では、参りましょうか」

足元が急に光始め、魔法陣が円を描きながら出来上がる。

煌めく文字が浮かび上がると足元から頭までと抜けていき、京子は体が抜けるような感覚がした。

草原にはもともとあるべき静寂が舞い戻り、そこに人はいなくなつた。

\*\*\*

そうだった、そうだった！

それでここに連れてこられて、今日はもう遅いのでお休みくださいませとかなんとかわれて。案内された部屋に備え付けのお風呂に入ってしまったらお風呂に入って冷えた体を温めたところで、寝台にもぐりこんで眠った、と。

そうこうして、今に至るわけなのよね。

「ふわぁーあ」

あくびをしながら、回想を終える。

今後のことを考えようにも情報が少なすぎるし。今日の午後にはまあわかるでしょ、多分。

それにしても。

「お腹すいたなー」

気づけば丸一日何も食べていない。

こんなときになんだと思うが、京子はもともと何があっても食は欠かせないたちなのだ。悲しかろうが辛かろうが人間お腹がすくときはすくし、状況が不明だからと言ってここまできたらどうにかなるものでもない。

「なんか眠ったせいか、まだ鈍い感じ」

夢みたいというか、まだ現実感が薄いというか。

自分が異界にいるなんて実感がしっくりこない。  
もうどうにでもなれ。

いや、成るように成る。うん。

「キョウコ様、扉を開けてもよろしいでしょうか？」

ぼーっとした後には一人腕を組み、背いているとドアの外で声があった。

瞳を瞬かせて現実に戻る。

「あっはい！ 大丈夫です！」

慌てて寝台から降りて扉を開けようと下にある靴を足にひっかけてそちらへ向かう。

けれど、それより早くドアは開いた。

きれいな色とりどりの食事をのせた盆を持って侍女らしき黒に白の服を着て髪をピシッと一つにまとめた女性が部屋に入ってくる。

片手で開けられたのを急いでドアのノブらしき部分を持って両腕で押さえた。

それを見て、侍女は恐れ入ります、と口にすると盆を部屋の中央にある簡易テーブルに置いた。

「おはようございます、キョウコお嬢様。お食事をお持ちいたしました」

「あつはい。おはようございます。どうもありがとうございます」  
きれいなお辞儀をしてみせる侍女さんにわてわてと内心焦る。  
私はこういうのはなれていないのよ！

いつもその場その場を慣れないなりに必死にやりすごしてきた京子は失礼のないようにと慌てる。

っていうか、しまった。

パジャマのままでしたよ……。

いくら言葉を丁寧に使おうが、しっかり接しようがこれでは。間抜けすぎる。

がくりと心の中で頂垂れる京子だった。

しかし、相手はプロ。

京子のだらしない格好も気にするそぶりを見せず用件を述べる。

「本日はこちらでお召し上がりとのことでしたので、運ばせていただきます。後ほどにディオール様はキョウコ様のお部屋に参られるそうですがよろしいでしょうか？」

「はいっ了解しました！」

そのときまでには着替えておこう、と京子は心に固く誓った。

## 闖入者

侍女が一礼して、部屋を去った後。

洗顔をすませた京子は運ばれた食事に手を付ける前に、一応さつと簡易に着れる服に着替えた。

昨日のうちにこの部屋のは勝手に使つていいとディオルから直接言われているので問題はない。

服が詰まっているだろう衣装棚に掛けられた布を左右によけてみると、長袖のワンピースのようなかたちの服が全体的に濃いめの色合いで並んでいた。

臙脂や紺、深い橙色にマスタード色。ベージュや黒。深緑色なんかもあるし紫色もある。

フリルや刺繍の凝ったもの。カギ編み、レースもちろんあった。「デニムがない」

収納されている服は落ち着きがあつて上品だ。

けれど、およそ現代っぽい服がない。ビビットカラーもパステルカラーもなければ、丈の短い服もない。

パンツスタイルにふさわしいボトムもない。

「北欧っぽい感じ？」

京子はヨーロッパを思い浮かべてみたが、いかんせんそんなに外国の歴史に明るくないので服装についてもさっぱりわからない。

おおまかな印象でものを言ってみたはいいいもののあとが続かない。

「わお。見事に膝丈かそれ以上しかないわ」

順々に見ていって、目についた襟についた白いレースが可愛い服をとると試着してみる。

「うん、なかなか可愛い」

満足げに鏡に映った姿を見ると後ろで湯気を立てている食事に気付いてハツとする。

「いけない！ 冷めないうちにいただいちゃおうと」

せつかくもつてきてくれた食事をおいしくいただかねば！  
くるっと回って鏡の前で変なところがないかチェックすると手を拭き、椅子に座って京子は食事を開始した。

\*\*\*

「お前がキヨウコ・カノミヤ？」

ノックもなしに部屋に入ってくるなり、正面の椅子にドカツと腰かけて男は言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうですが」

「ってことは、お前が王妃の魂魄共有者だっていうのか!？」

思わずといった態で身を乗り出す男から若干距離を置きつつ見やる。

そうされるとちよつと近いのよ。

なんか図体が大きいというか悔しいことに身長が高いから、あなた。

「・・・・・・・・・・そうらしいですけど」

ところで誰だ、この無断侵入者は。

どうして私の名前やらを知っているのかなあ。教えたのは誰よ？

「あ、ありえんだらうが！」

いきなりの否定にむかつ腹が立つ。

なんだこの失礼な人はっ！

責任者出てこいっ！

言い訳も弁解も事情説明も今の京子にはできない。  
何しろいらつとさせられる突然の訪問者に言うべき言葉がない。  
というかこの心境で口を開いたら罵詈雑言が出る。  
それにイラつきを抑えて馬鹿丁寧に話し相手なんてしたくない。  
そういうわけで無言を貫き通すことにした。

だいたい、ありえないと言われようと京子にはいまだ何一つ確証的なことはつかめていないのだ。  
昨日はざつと話をきいただけ詳しいことはディオルが今日教えてくれることになっている。

だから京子には、この世界の知識はないに等しい。  
これ以上何を言う必要があるだろう。重ねる言葉も持たないのに、ただ今思ふのは。

ちよつとは黙つてちようだいよ、ということだけだった。  
食事がまずくなるでしょうが。

「おい、しゃべれないわけじゃないだろう?」

「・・・・・・」

「うんとかすんとか言えよ」

「・・・・・・」

黙々と、ただスプーンを動かす。

「おい」

「・・・・・・」

「無視するな」

のどを潤して、嚥下すると目の前に居座る癪に障る人物に文句の一つでもいっべく口を開いた。

「うるさい」

「何だと!？」

「さつきからいきなり押しかけてきて、人の耳元でとやかくしゃべってくれて耳障りつたらないのよ。男のくせにびーちくぱーちく

うるさいったらないわ」

「好き勝手に言わせておけば……」

「人の食事中に目の前で雑音を垂れ流されれば嫌味の一つでも言いたくなるわ」

「この女ッ！」

眉間に青筋を立てる男に心の内で一割ほどびくびくするがそれを悟らせるような真似をしない。

引け腰になりそうな自分を奮い立たせて、きつとにらみをきかせる。

「……ずいぶんと達者な口をきくじゃねえか」

「不愉快さの前では人は饒舌にもなるものなのね」

「口をふさいでやろうか」

強面の男にビクつく。

「わーんッ！ やっぱ怖い！」

「ふんっ。黙ればいいんでしょ。まったく。話せと言ったり黙れと言ったり。せいぜい一人で喚いていればいいんじゃないの」

男はぎりぎり歯ぎしりせんばかりに京子を睨みつける。

狼が牙をむいたような形相にちよつとやりすぎたかしら、と思いつつも今更引くこともできない。

一触即発の雰囲気の中。

扉は至って単調な音を立てて開いた。

「何をしている？」

## 闖入者（後書き）

相性が悪い人というものはいるもんです・・・。。

## 幼馴染（前書き）

なんだかんだいっても息ぴったり？なふたりです。

## 幼馴染

どうして二人ともノックというものをしないのかしら。

ひらいたドアから入ってきた人物を見て、まず京子はそう思った。

「ディオル！」

「クウエル、お前がなぜここにきているんだ？」

なるほど。この傲慢で将来絶対亭主関白たる貴様、な男の名前はクウエルというのか。

脳内にある廊下で出会ったら真っ先に避けよう人物リストに追加しておこう。

それはともかくお二人はお知り合いですかね。

「おいディオル、この女は駄目だ。いまずぐにどうにかしろ」

「何を言っているんだ。大体お前今日は訓練監視官の会議の日だろう？　こんなところで油を売ってないでさっさと行ったらどうなんだ」

呆れ眼で見やるディオルの視線もなんのその。

クウエルはフンツと鼻息荒く言い放つ。

「そんなかつたりいもんやってられるかよ」

「つまり出たくないんだな」

「代理に行かせたからいいんだよ」

「またか。こんな上司を持ってオルベルも気の毒に」

「いいんだよ。あいつはそういうのに向いているからな。俺はそれを見込んであいつに任せているんだよ。これも教育ってやつだ」

「相変わらず変なところで弁が立つ」

嘆息交じりに言うディオルにクウエルはかかかと笑って見せる。どうしようもないな、こいつ。

部下に仕事押しつけて自分はこんなところでクレーマーしているのね。

呆れたわ。

そして私はこんな上司を持ったらいやだと思います。

それにしても打てば響くような二人のリズミカルな会話からは彼らがかんり親しい関係にあるのだと推察されますね。

うん、どういったご関係でしょうかねえ。

まさかの兄弟？ いや知人？ それとも同僚？ うーん、上司と部下の関係？

「で、お前はここに何をしにきているんだ？ 初対面の女性の部屋にきて。まだお前との顔合わせは考えてなかったんだが」

「かたいこというなよ、ディオル。そんな大して変わんねえって」

「彼女に関する責任は私が持つことになっている。お前に勝手な行動をとられると困るんだ」

「いいじゃねえかよ」

「幼馴染というだけでお前の失態の尻拭いをさせられる身にもなれ。いい加減に縁を切るぞ」

「はいはい。以後気を付けますかね」

ディオルがクウエルの相手をしてくれている間、途中になっていた食事を再開した京子はもくもくと皿の上のものを消化する。

目の前の男二人の会話を耳に止めつつ、最後の一皿まできれいに食べ終わると京子は思った。

んー。ここまで拝聴しました結果。

どうやらこのお二方は幼馴染のようですね。

ということですね、もしかしたらですね。ずばりですよ？

「それに彼女がこの部屋にいることをどこから聞きつけてきたんだ」

「エイフェルに世話を任せてたろ、お前。それで、だな」

「まったく。なんでそんなところで察がいいんだか」

「もうちょっと策を練るんだったな」

「しばらくは時間をおいて隠しておきたい気もしていたんだけれ

どな。お前、この間まで遠征中だったろう？ 詳しいことは知らないはずだと思っていたのだが」

「お前が俺を出し抜こうなんざ百年早え。何かやってんなあと思っ  
てちよろつと情報収集くらいしておいた。それにお前と伊達に長  
年幼馴染しているわけじゃないからな」

「失敗だ。そもそもお前と腐れ縁なのが最悪だ」

私の存在を貶す、失礼千万な上に礼儀知らずと一緒に仕事したく  
ないと思わせる、こちらで勝ち誇った笑みを浮かべている馬鹿に気  
取らせたのは顔を片手で押さえていらつしやるあちらの方が原因  
ということでしょうかね。

んでもって、このクウエルとかいう男を監督しとくべきはディオ  
ルさんなのかしらん。

よく馬鹿の不始末を片付けていらつしやるようですし？

つーまーりー。

この馬鹿に首輪をつけておくべき保護者はあなたなわけですか。  
幼馴染の面倒を見るのはさぞかし大変だろうと同情を覚えないこ  
ともないですが、なんとなく腹が立ちますねえ。

ええ、決して自分に火の粉が降りかかったことが理由ではないで  
すよ。今まで火の粉を振りかぶったであろうあらゆる方々を代表し  
てですよ。

ええ、決して自分が放置されて二人が仲良く会話しているところ  
に疎外感を感じたとかではないですよ。異界の地でちよっぴりセン  
チメンタルな気分になんてなっていないませんってば。

「どうしました？」

「いえ」

胡乱気な眼差しで見上げる京子に気付いたディオルが尋ねるも、  
京子が心の内をはつきりと返答することはない。

ただ今後、この二人の関係を見るに一方に何かを秘密をもらすと  
自動的にもう一方に暴露されそうだなあと思つて気を付けようと京  
子は思つたのだった。

そうして再び己の思考に没頭しそうになる京子を傍目に二人はまたもやぼんぼん勢いのよい言葉のキャッチボールを楽しんでいる。そろそろ目の前の光景にも飽きてきた。

こういった男同士のものが大好物の友人Aなら喜んで目を輝かせるのであろう場面だが、その言葉の応酬をいい加減に切り上げてくれ。

私はBLを間近で楽しむ趣味はない。だからこう言ったのです。

「早く本題に入ってください」

## 幼馴染（後書き）

さみしいときはひねくれちゃったりもするのです・・・。  
この作  
品にB1要素は一応ありません。

そろそろ詳細をご説明ください

「ああ、そうでしたね。これは失礼いたしました、キョウコお嬢さま。ついこの馬鹿にかまけてしまいました。お待たせして申し訳ないかぎりです」

「馬鹿とはなんだ！」

言葉づかいを改め、優雅に一礼までして見せたディオルと違い、クウエルは吠えるだけだ。

いや、別に特別敬ってほしいとは言っていないけどさ。そうそう蔑まれなければ、とりあえずは異文化交流に問題はないと思うよ？

「これからのキョウコ様の待遇についてですが……」

京子の方へ向き直り、話し出そうとしたディオルはちらりと目線をぼけっとしてゐるクウエルの方へ投げかけると口調を切り替えて言った。

「クウエル。お前は出ていけ」

「は？　なんでだよ」

思ってもみなかったことを言われたといった表情のクウエルは片眉を跳ね上げる。

「これから大事な話をするんだ」

「いいじゃねえかよ。ちょうど、ここにいるわけだしな」

引く様子のないクウエルを見て、厭そうに軽く目をそらす。

はあ、と短く嘆息すると、ディオルは表情を引き締めて声音を変えた。

「いいか。俺はこれから予定通りに、お話をしたいんだ」

「すればいいじゃねえかよ」

「お前がいると邪魔なんだよ。気が散る。第一うるさい。本来ならここにお前はいないはずだった」

「だから？」

「クウエル、即刻この部屋から出ていきなさい。そして政務に励

むように。さもなくば今年度の予算を減らす」

最初は諭すように言っていたものが、次に断片的になり、最後は  
致命口調になった。

「ひつでえ。横暴だ！」

「いい加減にしろ。早く出ていかないと本気でやるぞ……」

「！」  
「わかったって！ ちつ、この職権乱用野郎め！！」

長年の幼馴染であるが故か。ディオルの本気を見て取ったクウエ  
ルはそう言い終わるなり席を立ち自身のすぐ後ろに構えるドアへ向  
かった。

大股で近づいたドアのノブを掴むなり、さっと開いたドアに素早  
く体を滑り込ませて、出ていく間際にこう言った。

「じゃあな、キョウコ。せいぜい頑張れよー」

「ご丁寧にひらひらと後ろ手に手を振って。」

「あれは嫌味なの？」

「ただの声援なのかそうではないのか。」

「どっちともつかない台詞に京子は頭の上で疑問符を浮かべたのだ  
った。」

「やっと二人きりになりましたね」

「あ、ええ。そうですね・・・」

奴の姿が消えるなり飛び切りの笑顔を向けられて、目が痛い。

ちよ、後ろにきらきら光る白銀色のきらめきみたいな何かが見えるよ・・・。

「キョウコ様、あいつに何か不愉快な思いはなされませんでしたか？」

「え、えつと・・・」

不愉快な思いは、まあ、したといえばしましたが。

なんだかこの顔で見つめられると答えにくいことこの上ないなあ。はっ、もしや！ わざとなのか！？ 幼馴染を庇うための防御なのか、それは！！？

・・・。

うーん。わからぬ。一旦冷静になってみたけど、考えたところあったばかりのこの人のことなんて何も知らないしなあ。ましてや異界。考え方にもそりやあ相違がありましたようや。うむ。生活環境が違っただけで驚くような習慣を持っていたりするものだしなあ。

そういえば昔、お味噌汁の中身が家によって豪い違っとなんとか見たような聞いたような。はるか昔の記憶過ぎて全然確かではない気がするけどね！ ちなみに家はお味噌汁には大抵のものは入れちゃうけどね！ 意外とどんな具材にでも合うお味噌汁は奥が深いよねえ。しみじみ。

つと！ そんなことを考えている場合ではなかった！ 料理評論、否、料理研究の前に、話よ話よ！

ええーつと何だっけ？

本筋からここまで遠ざかる前には何を考えていたんだっただかな。

脱線の理由は・・・。ああっそうだった、そうだった！

極端に話を戻せば、知らない人との意見の相違及び誤解は生活環境から生まれるということ。

突き詰めて言えば、私はこの世界のことでもそうだけど、この人のことは何も知らないなあ、ということ。

名前以外は知らないな、ディオルさんのこと。

あとは私を召喚したのがこの人であるとか、なんか幼馴染のお守りが大変そうとか偉そうな仕事してそうとかぐらいかなあ。

「そういえば、ディオルさんってお仕事は何をしていらっしやるんでしたっけ？」

「私ですか？　そうですね、れいどうし霊導師というのが私の職名で、王宮につかえていますので王宮霊導師というのが私の仕事になりますね。それに伴って、今回の件ではキョウコ様の召喚を承りまして。更にキョウコ様についての全権を僭越ながらわたくしが預からせていただいております」

質問に明確な答えをせずに、結局話の流れを変えてしまった京子に追及はせず、ディオルはきちんと言葉を返した。

ごまかしたという意識は京子にはないのだが、若干そういった感じではある。けれども、にこやかに語るディオルからは何も読み取れない。

それにしても、さっきまでばんばん普通にクウエルと言いつついたディオルに丁寧な言葉を使われ、傳くような態度をとられるとむずかしい気分では仕方がない京子である。

お、落ち着かない！

先ほどまでの態度と随分と違うのだ。笑顔なんてさっきは全然なかったのに、今は始終笑みを絶やさない。

どちらが本当なのだろう。

今見ているディオルの姿と幼馴染といたときの姿。偽りなのはどちらなのだろう？

目にしているこの笑顔は作られたものなのか。そうではないのか。考えるほどにわからなくなる。そして身動きが取れなくなる。

自分がどういった対応をすればいいのか考えてしまい、どれが正解なのかわからなくて不安になる。

陰る表情を目に止めたデイオルが心配げな視線を京子に寄越す。

「キヨウコ様？」

「あつ、いえ！ すいません、お話し中に。何でもないです」

きつと忙しい中、時間を割いてくれているのだろうに失礼なことをしてしまった。

身を引き締めておかなければ！

京子は俄然、やる気モードにチェンジした。

「それで、その霊導師というものは何をするお仕事なのですか？」

とりあえず、まずは情報収集といこうではないかね、諸君！

そろそろ詳細をご説明ください（後書き）

クウェルも京子もなかなか話を進ませない人ですね……。。

**身元責任者（前書き）**

ちよつとペースが落ち気味です、すいません。

## 身元責任者

「霊導師というのはですね、人の魂はもとより、動植物あらゆる魂を導く者のことをいいます。具体的には、この世界に存在しうる自然霊の力を借り受けて、その力をうまく引出し、魂を流れに乗せて流すことを可能とする者のことですね。この惑星の生命力を借り受けるということは、世界と対話する能力を持つ者のことでありまして、またその能力は非常に希少であるとされています」

穏やかに話される未知の内容に、京子の頭は必死について行こうとするが言葉は咀嚼される前に空中分解して消えていく。

さっぱり、わけわかんないわー・・・・・・・・・・。

霊導師。霊、だから魂ってこと？

でもオカルトって感じではないのよねえ。

自然霊っていうのは世にいう精霊みたいなものなのかしら？ それか万の神様みたいに自然にも命があるとかそんなん？

はあー。昔は柔軟だった頭が年とともに呑み込みが悪くなっている気がする。ことファンタジーに対してはそれが顕著よねー。

まだ政治とかのことの方がわかるような・・・・・・・・。あれはあれで七面倒くさいけどね！

ファンタジーは想像力も使うしなあ。柔軟性が必要よねえ。かつちこつちになると駄目だわね。脳トレでもするべき？ ゲームはあんまりやらないんだけどなあー。

それはともかく。うーん、なんていうかな。

無意識に現実と照らし合わせて、今まで培ってきた常識に反すると若干の拒否反応？ 内容を意識せずにブロックしようとする拒絶の壁が脳内に発生しているような気がするなあ。

「ん？ うーん」

「大丈夫ですか？」

眉を顰め、軽く唸る京子にディオルは一步近づく。

「なんとか。でも、またわからなかったら質問をしてもいいですか？」

「ええ、もちろん。どうぞお気軽にお尋ねくださいね。誤った認識はキョウコ様のためにもなりませんから」

質問しようにもよく考えて噛み砕いてからでないところっちゃになりそうだな。

異界文明のついての理解を補助するのにいいたとえばも思い浮かばないし、これは少し時間をおこう。

「次に、キョウコ様の今後の待遇についてですが」

そうだった！ デイオルさんにとってはこれが本題だったはずだ！ すっかり話が横道にそれてそれて……。あれ、でもさっきのことも大事よね？ まあいいか。きけるだけのことはきいておこう。まずは目の前の話だ。

「今後、私はどうなるのでしょうか？ 王妃様の魂魄共有者ということしかまだわからないのですけれど」

呼ばれたはいいいけど、詳しいことはからきしわかんないんですねー。

我ながらこの状況でよくしびれをきらさなかったものだ。切れて目の前のデイオルさんに突っかからずにすむくらいには成長したのかしら。いや、ただ単に度胸がないだけかも？

「まずキョウコ様のことは異界からの召喚された者であることは伏せて王宮に新しく入った者として公表させていただきます。また王妃の魂魄共有者ということは対外的には伏せさせていただきますと思います。王妃の身边には十分気を付けておりますが、王族は常に命の危険さらされておりますので、その王族の一員である王妃の魂魄共有者であるキョウコ様にも累が及ぶ可能性もなきも非ず、です。万が一に備え、存在は伏せさせていただきたく存じます」

ふむふむ。えーっと、つまりこう言っていると。

「身を守るために、危険からは遠ざかるようにする。けれど王妃様には接触できるようにっていったところなのかしら？」

「はい、そのとおりでございます」

考えを整理するために呟くように言った京子のそれにディオルは肯定した。

空に漂わせていた視線を再びディオルのものと合わせて、京子は言う。

「異界の者ということも言っではいけないのは、ひょっとして」

「異界というものは私の世界でも秘された存在なのです。いたずらに自分たちの世界とは別の世界があることを暴くのは混乱を招きます。そのため、今回もそれを黙したままにさせていただきますことをご了承くださいませ」

「わかりました」

世界は一つであるという前提知識は地球と同じ考え方のような。

「キョウコ様は、私の遠い縁者ということで皆には紹介します。」

また私の研究を手伝ってもらう者として、あなた様を雇ったことにします。昨日のうちにあなた様に関する全権を私が預かることができるように手配いたしました。キョウコ様の身にもしも何かあったとしてもそれはすべて私の責任となります。何かありましたら私にすぐにお知らせください」

えーっと、ディオルさんの遠縁で助手であることが私の仮の姿でことなのかな。

研究ってなんだろう？ 実際に手伝うこともあるのかな？ そもそも手伝える内容なのか疑問だし。

霊導師の研究なんだから、霊について、とか？ 世界の理を解明せよ！ なんていうこともあるのかんねえ。

しっかし昨日のうちに私のお守り係を名乗り出るとは。行動が早くていらっしやいますな。

迅速な行動、素晴らしい！ ありがたや、ありがたや。

けどまあ、ディオルさんに全権ってことはディオルさんにすべてがかかっているわけで。

申し訳ないなあ、という思いとこの人なくして私はやっていけな

い状況かい！？　っていう。

うん、適度にご機嫌をとっておこうかな。怒らせるわけにはいかんだろ。でもおべんちゃらって苦手なのよねえ。私ってわりと素直な方なので。あんまり嫌いな人とも仲良くできる自信はないのですよ。

とりあえずディオルさんが私の苦手な人種じゃありませんよーに。この年になればどういったタイプを自分が受け付けないのかは大体把握しているつもりだし、対処法も一応は心得ているけど、この世界での私にとって重要な位置を占めるであろう人とはできれば気軽に仲良くやっていきたいものですしね。

それに仮とはいえディオルさんが私の上司になるみたいだし。

ちらつと見るとディオルさんは微笑みを浮かべつつも真剣な感じで、言葉を続けている。

「もちろんキョウコ様の身に何も起こらないように全力を尽くさせていただきます。キョウコ様がこの世界で快適に過ごされるように手を尽くすこと、心身をお守りすること、召喚にあたっただけのお願しいたしましたことを恙なく実行できるようにお助けすることなどといった事柄すべてが私が承りますので、どうぞご安心ください」  
私にとってディオルさんは保護者で庇護者。ついでに上司で同盟者ってとこなのかな。ちよつと違う？

っていうかディオルさん。なんかさっきより力入ってないか？  
その話しぶり熱くない？

身元責任者（後書き）

内容がまとまらない o r z

## 王妃の魂魄？

まあ身元が安心・安全・保障付きになるのはわかった。

そうすると次に知りたいのは京子をこの世界に召喚する理由ともなったことについてである。

「それで？ 私はどうやって王妃様のご友人になるようになっていたのです？」

最初、ディオルはこう言った。

王妃のご友人になっていたみたいです。

あのように言ってきたからには何らかの筋書きがあつてことだろうと思う。何しろ王宮だ。国の中枢での出来事と言っても差支えはないだろうか。

けれど京子はあれから何一つ、詳細なことはわかっていないに等しい。

まあ昨日の今日だしねえ。

ただ異界に呼ばれた理由が理由だけに気になるところである。

普通、召喚理由にそれが来るのか？ という違和感がものすごくあるのだ。

自分が！？ っていう主人公が己に課された大役にびっくりして本当に自分でいいのかしらんと疑問を抱く違和感ではなく、この理由でわざわざ異世界から人間一人ひっぱり出してきていいのかいね世界の秩序とか大丈夫なん？ という違和感であるのです。

まー私なんぞ普通の一般PEOPLEなんで、大した影響力もないでござんさあ。無用な心配ネ。……。そろそろ変なしやべりも疲れたな。

さてさて、気を取り直して。

今現在どういうことが起こつてこういうことになっているのか。これからどうするのか。

教えていただこうではございませんか。

「キヨウコ様には私の助手として王妃に接していただきます」

助手として？

「はあ、あれ？　そもそも私を呼び寄せたのは王妃様ではないのですか？」

王妃自身が呼び寄せたのなら、助手という仮の身分なんぞ使わなくたっていいんじゃないか。話が通じにくくならないのかしら。むしろ普通に王妃の魂魄共有者です、って言った方が仕事が早い気がするぞ。

「いえ。王妃のためではあるのですが、王妃自身がそうせよと口にしたわけではないのです」

はて、王妃ではないならば誰が京子を呼び寄せたのか。どうしてもいいけど、どうしてもよくないような。

それに。

「魂魄共有者と名乗って接しないのはなぜですか？」

正体を隠す理由がわからない。

「わからないからです」

淡々と口にされた、その回答の意味こそがわからない。端的に過ぎる！

ええい、まどろっこしい！

「そもそも発端はなんですか？」

京子をここに呼び寄せるに至った過程は何であるのか。

核心を衝こうと京子は胸の内にある言葉を音にする。

そして、その言葉を耳にしたディオルは表情を曇らせた。

どんな不穏な事柄を聞くことになるのかと京子は一瞬、意識せずに身構えた。

ディオルは口が重くなつたかのようにゆっくりと動かした。

「実は、王妃は先の月に魂魄の一部を何者かに奪われてしまったのです」

「魂魄を？　それって生きていける、のですよね？」

魂がかけた状態というのは通常とは違う状態なのかわかるが生命体として機能するのだろうか？

魂が身体を動かすわけではないというの京子の世界の考え方だが、この世界はどうだかわからないし。聞きかじったところ、なんだか魂魄って大切なものみたいであることだし。

「生きてはいけます。しかし虚無が深い状態となってしまうのです」

要するに鬱状態のようなものになるといことなのか。

何をしても心が浮かない。切ない。空虚だ。空しい。そういった感情で満ち満ちているということなのだろうか。

「王妃は衰弱しておられます。自我がふとしたときに戻る以外は抜け殻のようで御劳しい限りの様子なのでございます。そこでキヨウコ様。あなた様のお力によってお救いいただきたいのです」

「力？」

特別な能力なんて持ってないんですけど。

思わず京子は顔をしかめた。

持っているはずの力を持っていなくて召喚詐欺だ！　とか言われ  
ても困るんですけど。

## 王妃の魂魄？

「魂魄共有者には癒しの力がありまして、大抵は同じ世界にありし者の魂とつながっているという考えられ、それに伴う実験結果もその予想どおり同じ結果のものが多いのです。魂魄共有者とは各々、一方で7対3の割合で魂と魄を所持しているもので、二人あわせてようやく100%になる仕組みです。ですので片方のみですと生命力が他より脆弱で、世界の恩恵を受けにくい場合がございます」

初めて聞く魂魄共有者についての知識に耳を傾ける。

ふうむ。単体でも生きてはいけるけど、双方そろっていた方がより強い生命力があるってことなのかな。

二人で一つならぬ、二人でより強く！ みたいな？

「今回、あらゆる手段を使い、試行錯誤を重ねて捜しましたが王妃の魂魄共鳴者はこの世界にはおらず、最期に靈魂の導きによりたどり着いた先があなた様であらせられたのです」

結果、京子が召喚されたということであろう。

「その、王妃様の取られた魂を取り戻すことはできないのですか？」

あるかないか疑わしい京子の能力よりはそちらの方が確実にあると思うのだが。であれば、さっさと取ったものを返させればよろう。

ディオルは首を左右にゆるく振って否、と示した。

「賊から取り戻すことは一度王妃から欠けてからかなりの時間がたってしまったので難しいですし、その者らの居所もわかりませんことにはより確実な方にかけるしかなかったのです」

魂魄の詳しい仕組みはわからんが、なんつつ面倒なことであるのか。

京子は内心、天を仰いだ。

そこではつと気づくと、いろいろと気になることが出てきた。

取り戻せないということであるなら今の台詞に聞き捨てならないことが含まれていたような！？　つまりは魂魄奪うような危険な奴らをそのまま野放しにしているということ！？

大丈夫なのだろうか、この国は。

とうかさつさとそんな危ない奴らは捕まえておくれよ！！　警察がこの国にいるのかは知らないけど、そういう似たような職の方はいるはずでしょう！？　怠慢ではないのかね！？

胸中、荒れ狂う京子をよそにディオルは告げる。

「頼みの綱はもはや、キョウコ様だけなのでございます」

明瞭な発音を持って発せられた言葉に京子の意識は再びディオルの方へと向く。

己の視界いっぱいには長身で白銀の衣をまとった男が映る。紫の瞳が京子の黒い瞳と視線を合わせる。

・・・・・・真摯な瞳に射すくめられたように動くことも喚くこともできない。

それにここまで言われると、引き下がれない気がするのは京子の気のせいではないだろう。

異界に一人。頼みの綱はあなただけと言われ。召喚理由の事情を解決すればもとの世界に戻してくれるという交換条件を呑んだ後。その上、人間として、こういう風に言われると断れない性を持った京子としては。

引こうにも引けない、この状況。

昔から真剣に頼まれると断ろうにも断るという意識がうまく働かない。

しかも、助けを仰ぐ人もこの部屋にはおらず、流すわけにもいかない。自分で決めて自分で責任を果たすしか道がない。

ああ言葉を紡ごうにも、何を言えいいのかわからない。思考は滞って、言葉は口の中から回るばかり。理路整然とした文章を吐き出すことが、とんでもなく難しく感じる。

どういえばいいのだろうか。

出来ない、無理だと誰かこの状況ではつきりと言えるのなら代わりに言葉にしてほしいと京子は思った。

困惑が顔に浮かぶのを己でも自覚する。

けれどもディオルは気づいているのかいないのか。なお京子に言うのだ。

「キョウコ様のお力によりどうか王妃を癒して差し上げて下さい」

決して押しつけがましくはない言い方で。やわらかいけれど押しのけにくい。

ああ、もう本当にどうしよう。やりたくないって言っているんじゃないのよ。ただちょっと不安なだけで。そんな能力がないってことになったらどうなるのかなあ。でも言わないと後が怖い。自分で毎日毎日怯えて、ばれないかと神経をすり減らすくらいならば。

もういつそ今言ってしまった方がたとえあとでどうなるうと知ったことでは………。

いやいや、ちょっと待ってよ！

そういうことであれば、まだそんな力があるかどうかなんて実感が無いってことなわけだし！

そ、そうだ！ よ、よし。勇気を出せ、京子。確認をしておこう。そうだ、拒否るわけではない。確認という作業だ。何事も見直しは必要だ。テストの答案用紙然り。見積もり予算然り。メールの文面然り。

呪文のように意味不明な言葉を唱えつつ、少し突けば瓦解しそうな落ち着きをなんとか取り戻す京子。

軽く息を吸うと緊張に震える片手を右手で押さえて、無理やり笑顔を浮かべる。

「本当に私に王妃をいやして差し上げることができるような能力があるのでしょうか？」

意を決した問いは、なんとか声の調子を乱すことなく言い終えることができた。

小さな目標を達成できたことで、やや肩の強張りが取れる。

そのまま勢いで言葉を足す。

「わからないのです、力なんて今までそんなものない生活を送ってきたので」

そこが一番の妖しい点なのよねえ。実に疑わしい。

別に何も変化を感じないしね。力とか言うと俄然、ファンタジーっぽいけれど。

昔はあこがれたなあ、特殊能力にある日急に何らかのきっかけにより目覚める物語とか好きだったしね。

でも実際に自分がそういうのっていう感じはないというか。もう人生を気ままに楽しみつつ、生計を立てて生きていこうと夢と現実に折り合いをつけていきつつあった私に能力、ねえ。

ありえないと言ったほうが断然ありえて、ちよつと今の境遇からするとディオルの答えが怖い京子だった。

けれども、最悪の予想に反して、穏やかな声音が耳に届く。

「今はまだ感じられないかもしれませんが、すぐにおわかりになるはずです」

伏せていた眼を上げれば、優しい表情のディオルがいた。

「そう、なんですか。ない、ということは……」

「大丈夫です。僅かながらキョウコ様の中にお力が宿っていることは感じ取ることができます。それにキョウコ様はこちらの世界に来たばかりです。しかし、そう遠くない日にご自分の中にあるお力に気付かれることでしょう」

覗き込まれた紫紺の瞳は確信に深く色づいて、京子にそう語ったのだった。

不安に揺れていた京子は心の中にわずかばかりの懸念を残して、あとは救われるように安堵した。

## 縮まる距離（前書き）

更新が遅くなつてすいません；

## 縮まる距離

聞きたかったことを聞けて、ほっと安堵した京子の眼前でディオルは、ふと思い立ったような顔をした。

そうすると、それまで纏っていた雰囲気を取り替えて、ディオルは新たな言葉を口にした。

「ああ、そうでした。キョウコ様。私にそのように話される必要はございません。普段、ご友人にお話しされるような口調で結構でございます。わたくしも外ではそのようにさせていただきますので、今まで気にしていたのだろうか。丁寧口調は不要と言うディオル。唐突なことに戸惑う京子だが、内心はあらわさずにそのまま話の内容へと進む。

「その方が円滑に物事が運ぶということでしょうか？」

「ええ」

今の今まで、初対面プラス庇護してもらった立場なのでエトセトラの理由によって敬語もどきを頑張って使ってきた京子。しかし、一方でディオルによる丁寧すぎる扱いになんか違うんじゃない？とも思っていた。

問答無用でこちらに呼ばれたのは困ったが、傳くような態度を取ってもらった身分ではない京子は明らかに年上っぽい上に、役職についているであろうディオルに使われる言葉に居た堪れない気分だったのだ。

「すいません！ そんな私に！ あわわわわ……」

といった具合に内心でびくびく、おどおど。チキンゆえであろうか京子はむず痒くて仕方がなかったのだった。

そういった状態から抜け出せる好機に京子は喜んだ。

それに、敬語よりも普通に話す方がお互いの距離が縮まるような気がする。

どこことなく、懇切丁寧に接するよりも相手の心の壁をすり抜けて

居座る、誰とでも対等な態度を貫こうとする人の方が親しくなるものが多い気がするのだ。

これからディオルにはいろいろこちらの界の話を聞かせてもらいたいし、助手としてやっていくのなら京子も親しくさせてもらった方がいいだろうし。そのためにはなるべく早く取れたほうがいい。

オープン マインド！ ってな感じで行きましょかね。心の扉を開けておくってことね。う、改めて言うとなんか恥ずかしいわ。英語の方が気安い。外来語って本当にポップよねえ。

日本語について思考が追求し始めた頃、京子はディオルと向き合っていた。

考えの総論を放って適当な言葉を発する。

「ではそうさせていただこうかなあ。カチカチ口調にそろそろ肩が凝ってきそうでしたので。ディオルさんも外とか中とか関係なく、普段通りお話してください。その方が私も気兼ねしないで済むので助かります」

誰も見ていないときだけとはいえ、あきらかにお偉い役職についているこの人の前で私だけ普段口調って絶対不遜な気がする。

たとえ二人だけのとき限定だとしても、なんか、ねえ？

なにしろ、この世界でも希少な能力の持ち主な方なわけだしね！

「ええ。では私もそうさせてもらいます。それにしても今日の服もよくお似合いだ。昨日のお姿もすてきだったが、こちらの服も実に馴染んでいる」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

異界の服とはいえ、人間の服。

素材もそこまで何かが変わるわけではなく、化繊がないくらいでデザインもシンプルなものが多かったので、大して違和感はない。京子が服に着られることもなかったのだろう。

一応、御世辞とはいえ褒められれば気分はいいものである。しかも相手は美形ときた。

ふむ、ありがたいお言葉を頂戴したぜよ。

心内で京子は腕組みをして風に吹かれる侍の如くなぜか夕日に黄昏た。意味不明なイメージだが、誰も心の内までは見えないので突っ込まれることはない。

「女性とは服だけでこうも印象が変わるものなのだな。昨日のキヨウコ様と今日のキヨウコ様はだいぶ雰囲気が違う」

「あつ名前も別に敬称は不要ですよ。普段言われていないので慣れないですし」

言い逃さぬように、京子は言葉を急いでねじ込んだ。

「だったら、キヨウコ。また言葉の使い方が戻っているのだが？」  
即座に順応したディオルと違い、京子は再び話し方が敬語調に戻っていた。

すぐさま指摘されたそれに京子は肩をすくめる。

「なんだか慣れなくて。ごめんなさい」

「無理にとは言わないが、何事も練習だ。そう固くなることはない。気にするな。適当に喋ればいい」

「あ、うん。努力し、いや、するね」

これだけ言うのになかなかの苦労をしたぞ。

まったく常日頃から丁寧言葉や敬語をなまじ心がけるせいで、普段言葉が苦手だ。どうにもこうにも話す途中でひっかかってしまう。言葉がもごもごと口の中で七転八倒しているみたいだってあれ、たとえ違う？ まあいいや。

それはともかく苦手なんだけれども慣れなければそのうち人目のあるところでぼろを出しかねない。ディオルも言っていたが練習練習と。

それにディオルとの距離を縮めなければ！

目指せ、酒飲み友達！ いやまあ普通でいいけどさあ。

どれくらいでもこの世界に還れるのかはわからないけど、なるべくならこの与えられたチャンスを思う存分に活かしたいし、ゆったりとした環境を作るためにも環境に馴染みたいじゃない？

緊張するようなところでは思ったように力は出せないし。安らぐ場所っていうのはどこでも必要だと思うのよね。だったら自分でつくる努力をしなきゃね！

一緒にいて楽しめる相手や親しみのわく人がいればたいいの環境は面白おかしくなるはずよ！

さーて楽しみだなあ。ディオルはどんな一面を見せてくれるんだろう？

## 縮まる距離（後書き）

しばらく書いていなかったなので書き方が、設定が、進み具合が・・・  
・・・とんだかいろいろ忘れ気味です^^;;

## 至近距離（前書き）

混乱すると人間、疲れます。

## 至近距離

ん？ それにしても気が付いたら。

この部屋に入ってきたときは、確かに一メートル以上の距離があったはずなのにいつの間にかその間隔は縮められ、あと一歩となっていた。が、それは先ほどまでのことで今や目の前にいる彼は京子の手を握り、顔はまさに30センチ以内の近さである。

どうしたものかね、これは。

たまにいますよね。顔をすごく近づかせて話す人。こっちはちょっとびっくりしちゃって、きょどりつつ視線を彷徨わせちゃったり。あーあと目力ある人がすごく視線を合わせてくるとなんか慌てちゃうなあ。落ち着かないんだよね、なんだか見透かされそうで後ろめたいところなんか何もないんだけど、心臓に悪いときどき感がたえまなく身の内から聞こえてくるんだよねえ。

それと電車で隣に座った者同士で会話するときも顔近くて駄目だわあ。どこ見ていいかわかんなくなる。もう少し距離が欲しいところよね。それから満員電車！ あのスし詰め状態で最悪なのは視線をどこにやればいいのかわかんない時なんだけど、その中でも最も困るのが顔が向い合せ状態になっちゃったときなのよ！ もう知らない人と暑苦しい車内で無言で見つめあう羽目になったときの気まずさといったら、ないわ……。あれはそうとうきつい。精神的にもげっそりだし、電車降りた後なんか本当に脱力。足も腰も肩も疲れて、ホームで大きくため息でもつきたくなるもんなのよねえ。あーいい加減にあの満員電車はどうにかならないのかしら。あれを改善したらもつと元氣がある生活が遅れるのではないのだろうかと若干思わなくもない。

つらつらとどうでもいいことを思い描いていた京子は鼻孔をくすぐるさらりとした香りにはっとする。

目の前にアメジストの瞳がある。

どきり、とした京子は内心で冷や汗状態だ。

吐息さえも感じ取れそうなのこの至近距離に不慣れな京子は顔面に血が集まらないように、意識を他へと向けようと努力する。

気づいたらおしまいだ。えーつとええつと……。

状況整理をしようっ！

一つ、異界のとある国におわす王妃様の魂魄共有者として召喚された。

二つ、元の界に戻るには、王妃様の失われた魂による痛手をいやして差し上げる必要がある。

三つ、身の安全のために、身分を助手なるものとする。

四つ、身元責任者は今眼前に迫る麗人である……………。

あ、いけない、と気づいた時には墓穴を掘り、目をそらそうとしたものから離れたのも一瞬で、結局はもとの木阿弥になってしまった。

目の前の人物から意識をそらそうとしているのに、逃れた思考がまわりまわって再びその人物のことを考えるようになってしまったのだ。これでは意味がない。

京子が己で己の首を絞めるような行いをして胸中でいたく呻いていた頃。

絹のようにさらりとした銀髪が、ふわりと揺れて京子の肌に当たった。その感触で他に向けられていた意識が、ふつと戻る。

「どうしたんだ？ 京子、具合でも悪いのか？」

耳に心地よい低さの声が肌を震わせる。

ひいひいひい！ 近すぎるうう！！

あの手、この手と緊張しないようにほかの手段を考えるも焦りにカラ回る思考では成功せず。

現実逃避むなしく、すぐに現実回歸する羽目になった京子であった。

「い、いえいえいえいえ！ 大丈夫です！ 問題ありません！ すこぶる良好です！ 万全なる体調でございます！」

「そうか？　ならいいのだが。京子、言葉」

「あつこ、ごめんね！？　すぐに慣れるようにするからさっ！」  
もう、いやあ……。

がくり、と無駄に力を使い果たし疲労する京子。

なんで、私がこんなに疲れなきやいけないの。うわーん馬鹿みたい。恥ずかしくなってきた。いや元からこの距離は恥ずかしい。落ち着かない。

人間には守りたい個人の領域というものがあって、それが守られないと不快に感じるという。だからあんまり近すぎるのは感心できることじゃなくってえ。

第一、ボディタッチとか苦手な人間が至近距離に耐えられるはずもなく、京子はもういろいろといっぱいいっぱいだった。

これもディオルがきれいすぎるからいけないのよあ……。

なんだか混乱して心内でディオルに八つ当たりする京子だった。

## 至近距離（後書き）

城下で買い物話までいかなかった！。  
次回はそこまでもっていきますっ！

## 服装（前書き）

話を半分に分けました。

## 服装

「それにしてもさつきも言ったが、今日の京子はなんだか随分と昨日とは印象が違うな。雰囲気というか……やはり服がこちらのものであるせいだろうか？」

とても不思議そうに言われるものだから、疑問なのだ、と京子にも察せられた。

さきほどのいわゆる感心しているといった具合の言葉ではなく、何故だろうかという謎を抱いての考えを持っている言葉だった。

ディオルに言われて、目を瞬かせる。が、すぐに思い当った京子は思わず、「ああ」と納得の呟きをもらす。

「それはきつと化粧のせいもあるだろうね」

「化粧？」

「女とは服装もそうなんだけど、化粧によってもつくられる雰囲気がいぶ変わるものだから」

実際、京子は意識して雰囲気を作る事が多い。

その日のテーマを決めて、それに沿うように服装、メイクを合わせるのだ。

「そうなのか」

女性のそういった行動をよく知らないようで、ディオルは未知なことを知ったように、ひたすらにきょとんとしている。

お姉さんとか妹とか、年の近い女の兄弟はいなかったのかな。

というか、きれいな人がきょとんとしていると爆裂可愛いな。…

…いやそれはさておき。

なんて思った京子は邪念を追い払って言葉を続ける。

「たとえば、昨日の私は割と落ち着いた感じで、けれども大人っぽく見えることを心がけていたのだけれど今日はわりとそのままなのよ」

俗にいうナチュラルメイクに、シンプルな異界の服。

京子は素朴さを今日のテーマとして据えていた。

まあ、テーマも何も、この際、手抜きといってしまうえばそれまでののだが。

「もことから雰囲気を変えたりすることが好きでね、いろいろとそれで遊んでいたりするの」

「遊ぶ？」

ディオルの眼が不思議そうな色を宿す。

様々な変化を見せるその目は、まるで万華鏡みたいで、面白くもきれいだっただ。

「なんていうかな、自分で自分を変えて楽しむっていうの？　こういう自分もあつたんだって発見してみるのよね。うまく言えないけど。それで街とかまで出かけたりしてみたり、とか」

京子の発した言葉を脳内で処理するために、ゆっくり意味を咀嚼する。理解が進むと、確認するようにディオルは言った。

「ということは京子の雰囲気はそういったもので変えることができるのか……。京子、変装は好きか？」

「あ、うん。メイクや髪形、服でだいぶ変えられるって言ったじゃない？　そういうので結構違う自分を楽しむの、好きだよ」

会話をしつつも、意識の半分は思考の海に沈んでいたディオル。しばし己の手元を見つめてじっとしていたが、とある結論に行きついたように。

「これは後々使えるかもしれないな」

ぽつりとひとりつぶやいた。

その言葉は、京子の意識に掠ることなく、そのまま空気にとける。

「ところでキョウコ。この部屋で何か足りないものや気に入らないものはなかったか？　あれば遠慮なく言ってくれと助かる。服もあれだけでは足りないのではないか」

そういつて視線で示されたのは衣装棚。

さきほど京子が見た限りでは、その備え付けの衣装棚には一応、

服を摩耗させない程度の隙間はあったものの、わりかしぎつしりと服が詰まっていた。

一週間コーデイネイトどころか二週間は余裕でいけそうだが、ざっと見ただけでも、そんなに着回しを気にする必要がなさそうなくらいの量で、けれど所要所を掴んでいる服が大いにあった。

気軽なものからかしこまったもの、シンプルなものが多い中でもきちんと遊び心のあるようなものも見受けられた。

これならTPOもばっちりであるといえるものだった。

身を飾る品々以外でというとまだよく見ていないので、わからないが少なくとも必要なものは既に目の行き渡る範囲に設置されているように思えた。

この部屋で生活することへ何一つ不自由なく快適に過ごせるようにと思いが込められており、また非常に手が行き届いていると感じられる。

「いいえ、十分。もう十分よくしてもらっているし。これ以上は分不相応だと思っけどな」

「そうか？　ならいいのだが」

若干残念そうに言うディオルに何故そうなるのかわからなかった京子は不思議に思う。

まさか、お偉いさんとなると一般人の数倍の量は必要とか？　いろいろと……。

そう考えて、絢爛豪華な部屋を想像しようとして自身の想像力の乏しさを思い知る京子。

うわー、陳腐なものしか思い描けない。我ながらがっくりくるわあ。

出てくるのは自分の常識内のもの程度で他には出てこない。およそセレブな生活に縁がなく、そういったものに憧れを強く描いたことがない証拠だった。

自分の興味関心のあることにしか手を出してこなかったからなあ。あんまりよくわかんないや。

これ以上、誇大な想像をするのは無理だとわかると、京子は考えるのをやめた。

## 服装（後書き）

次はちょっと甘め要素あり？

## 女たらし（前書き）

ディオル、一歩攻めます！

## 女たらし

どうでもいい思考を脳裏の彼方へと放り投げる。

そして、はたと思い当る。

「ねえねえ、ここの街ってどんな感じなのかしら？」

「街、か。そうだな……。城下町なら商業が盛んだな。各地の名産、芸術品を取り扱う店が軒を並べて、毎日人々で賑わっている」

「ふ〜ん。ね、暇ができたらいいんだけど、私そこに行ってみたい！ 駄目、かな？」

強く主張した後、ちよつと弱気になってしまい最後、京子は怖気づいた。

やっぱりいきなりやってきた来訪者がわがままいうのはなしかなうん、居候の身でかな〜り図々しい気はする。確実にする。いや、でもせっかくの異界だし。雰囲気とか掴んでおきたいよね。なんかこの建物の中だけで知る空気じゃなくて、街の空気が知りたいし。そういうものの方がこの国がどういったところなのかがわかるきっかけになりそう。

これから仕事中心になったら、そうそう街に下りる機会があるかどうかなんてわかんないし。いや、むしろないな。そんな予感がする。

もちろん、一か所で全部を知った気になるなんて、そんなつもりは毛頭ない。けれど国中、世界中を見て回ることもなんて許されないだろうことも誰かに言われるまでもなく承知している。

で、あるのならば。

城下町くらいは見てみたいわねえ。何も知らないよりは一か所でも民衆の生活するところをみておいたほうがマシだろうし、雰囲気味わっておきたい。活気があれば安心だし、沈んでいたら不安になるだろうけど、それでも知らないよりは知っておくほうが若干の差とはいえ、知識になるはず。もしかしたら後々なんか役に立

つかもしれない。

そういった意図もあって、京子は街に行きたいと口にしていたのだが果たしてディオルの反応はというと……。

恐々と京子はディオルを見つめていた。

ディオルは京子が街の話の話を唐突にしたので何かと思ったが、内容が他愛ないものだったので安心したように朗らかに笑った。

「ふふつ。いいさ、暇ができたらいわず、さっそく明日にでも案内しよう」

「え、本当に？」

そんなふうには、急に言い出したことが実現するとは京子も思わなかったたので、驚きに目を丸くする。

「ああ。せっかく遠い地からはるばる異界にまできてもらったことだ。楽しい思いもしてもらわないと。確かにやってもらわねばならない仕事はあるが使命感でいっぱいになりなれるより適度に息抜きもしておくことも大事だ。それに京子にはこの世界でいい印象も持つてもらいたいからな」

てつきり使命を果たすまでは我慢してくれといわれるかもしれないと身構えていた京子はあっさりと許可が下りてしまい、力が抜けた。

だが同時に、

ちよつといいかも、ここ。

と思ったのだった。

押しつけがましくない、ある程度の自主性はどうかやら尊重してくれそうだった。

あんまりきつきつした行動を強要されないかもしれない。まあ場合によっては予想に反して厳しいという可能性もあるけれども。

だから今は優しい、とか？

考えても詮無き事である。京子は首を軽く左右にふる。

せっかく頂戴した機会は活かすに限る。

「それでは今日はこの辺で」

気づけば、窓の外は紅く染まりつつある。夕日である。

どうやら結構な長い間、話していたらしい。京子の起きた時間も遅かったのだらう。多分、京子にとって異界で迎える初日に当たることから配慮して寝かしておいてくれたようだ。

「明日、迎えにくるから」

ディオルが身を引くことによつて、二人の間に距離ができる。

そのことに自身も知らずの内に息を詰めていた京子はふうっと安堵する。

よくまあ、この至近距離で普通に会話がなされたものだ、と京子は己で己に感心した。

ようやく胸をなでおろすことのできた京子の視界の端を影が横切る。しかし長い間、無意識に緊張していた体は一息に力を抜いていて瞬時に対応できない。

その影はすつと伸びてきた手。

指先がさらりと京子の耳の後ろを触る。

気づいた時には片頬に優しいキスが与えられていた。

室内でも煌めく白銀の髪が驚きに目を睨る京子の顔の上をなぞる。頭の中では思考という思考が停止し、空白が横たわる。

頬からディオルの唇が離れた、一瞬の後に稼働を再開した京子の脳は一気に情報であふれかえる。

マシユマロみたいなふわつとした感じ。本当にこういう表現があるものなのねえ。あ、でも、どちらかというと厚いつていうよりは薄い唇だものね。羽のような、の方が正しいかな……っ違う、じゃなくって！

素直に頬への口づけの感想を脳内で述べていたが、それも現実から逃れる術にすぎない。瞬きを繰り返す京子は瞠目して、自身の身に起こった出来事を認識して、現実を直視する。

企みの成功した子どものような、策士のような、決して冷たいわけではない、温かみのあるいたずら心に染まった笑みをディオルが浮かべていた。

ちょ、これがただのあいさつにすぎないっていう私の希望的観測は！？

ディオルの確信めいた笑みが、それを裏切る。

この世界のこの国に外国の挨拶のような意味で頼のキスが存在するかは不明だが、ただの挨拶にすぎないわけではなく何らかの他意の込められたらしい先ほどのものは、京子の体温を否応なしに上げていく。

赤くなるまいとする意思に反して顔面に集まる血液の流れ。それに必死に抗おうとするが効果はなく、逆に症状を悪化させている気すらした。

「名残惜しいけど、また明日」

そう言って立ち去った影が扉の向こうに消えて、京子はへなへなと脱力した。

座っていた椅子に身体全体でもたれて、ぐったりと背もたれに頭を預ける。

なんだったの、あれは。

考えたくない。けれど考えてしまう。

あの衝撃。

「ああーもう！」

一人になった空間で呻く。

恥ずかしくて、混乱して、意味がわからなくて。

つと、考えて。

思い至る。

はっ、そうか！　これが俗にいう女たらしってやつなのね！

女好きなの！？？　かもしれない！？

ちよっとしたからかいっていうか愛嬌？　ん、愛想？　いや、違

うな。女好きなりの挨拶ってやつか！

そうだ、それに違いない。

あんな手慣れた仕草、絶対に経験者だわ！

椅子に腰かけて微動だにしない京子は、胸中では力強く何度も肯

いていた。

そうしてディオルは京子の中で見当違いも甚だしいところのキャラクターを確定されたのだった。

## 女たらし（後書き）

京子の危機回避本能によりディオル、空振りに終わる……？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8467n/>

---

異界へようこそ

2010年11月3日19時15分発行